

# 詩 經 研 究

## 《詩經》とその中国文学における地位

エヌ・テ・フェドレンコ

川 上 久 寿 訳

### 結 語

#### I

《詩經》は並々ならぬ独特な詩で、中国古代社会の生活のありさまが不思議なほどうつされている一幅の画といってよい。《詩經》が古代中国人民の歴史を啓示していることは、おそらく古代中国にかんする多くの歴史的・人類誌学的著作やその他の著作よりもずっと完全かつ深刻かもしれない。

中国や外国で《詩經》はいろいろな観点から研究されている。中国の学者の多くの著書でこの本が歴史の記念碑として研究されているのは、古代中国の社会構造、古代からずっと保存された社会関係、習慣と儀礼、周時代の物質的文化の発展について貴重な報告をふくんでいるからである。《詩經》中の作品には古代中国の生活が多様なうちにしかも完璧に描かれている。《詩經》はすでに学者たちによって非常に高い評価をうけたが、特にその民間歌謡は生活の歴史的條件、古代中国人の人類誌学的特徴を理解するための源泉として価値がある。その歌謡には生々と色どられた人民の明確な歴史、各方面にわたる人民の日常生活やその鮮かな特徴がみえる。これらの問題はつねにそれぞれの時代での中国の研究家たちに異常な興味をかきたてさせた。過去の歴史家や文献学者の数多い著作はそのために書かれたものである。現代中国で最も傑出した学

者の王国維、郭沫若、鄭振鐸などの研究ではこれらの問題に大きな注意がむけられている。かれらは《詩經》の諸問題にかんする仕事で多大な貢献をした。最近これらの問題を新たに研究した中国の有名な文芸学者が一連の興味ある著作を出した。ここでは特に、王瑤<sup>1</sup>と詹安泰<sup>2</sup>の著作、江逢儉<sup>3</sup>、胡毓寰<sup>4</sup>、高亨<sup>5</sup>その他の人びとの論文をあげねばならない。

《詩經》は儒教の經典として多くの学者に研究されている。《詩經》の注釈の豊かな資料のうちに、儒者内部の諸学説のさまざまな戦いとその学説の発展を容易に見ることができる。われわれはその資料と注釈によって儒教の支配思想と儒者の政治的意図をもった「物事、支配および儀礼の理想的秩序」にかんする儒教の教えを知ることができる。ここで特に興味ぶかいのは、著名な哲学者で文献学者の朱熹<sup>6</sup>、文学者でまた学者でもある歐陽修<sup>7</sup>、注釈家として有名な孔穎達<sup>8</sup>、古代の学者毛亨<sup>9</sup>、その他の人の書いたものである。これらの非常にすぐれた研究家と注釈者の著書には、《詩經》の研究と注釈上の多くの問題についてさまざまな時代の儒者の見方や考えの推移が記されているし、儒教世界観における各種の学説と傾向の衝突と闘争が反映されている。

古代漢語としての《詩經》は言語学者にとっても古代漢語の音韻を明かにする方法となり貴重な材料である。

この書物のおかげで、古代漢語の歴史と進展、あるひとつの形態から他の形態への移向がしらべられるかもしれない。

中国の言語学者たちによって《詩經》の音韻構成研究にかんする歴大な文献がつくられた。この問題にかかわる何十何百の研究のうちで、陳第<sup>10</sup>、顧炎武<sup>11</sup>、孔廣森<sup>12</sup>、夏忻<sup>13</sup>といった立派な学者たちのたいへん貴重な書物をあげねばならない。これらの研究のおかげで《詩經》のテキストを正しく読み、この詩の当初の音韻を明かにし、たったひとつしかないこの記念すべき書物の古代の記録に含まれる多くの秘密を解きあかしてゆけるようになったのである。

以上にあげた《詩經》の研究方法はどれも全く合則的であり、この書物のための特殊な方法と分析をまとめている。

1. 王瑤, 中国詩歌發展講話, 北京, 1956年。
2. 詹安泰, 容庚, 吳重翰, 中国文学史, 北京, 1957年。
3. 江逢僧, 詩經大小雅所反映出的社会現實, 文史哲, 10号, 1957年。
4. 胡毓寰, 從詩經噫嘻篇的一些詞義說到西周社会性質, 學術月刊, 10号, 1957年。
5. 高亨, 詩經引論, 文史哲, 5号, 1957年。
6. 朱熹, 詩集傳, 詩序辨說。
7. 歐陽修, 毛詩本義, 通志堂經解本。
8. 孔穎達, 毛詩正義。
9. 毛亨, 毛詩傳箋。(傳は毛氏, 箋は鄭玄)
10. 陳第, 毛詩古音考, 學津討原本。
11. 顧炎武, 詩本音, 皇清經解本。
12. 孔廣森, 詩聲類, 皇清經解續編本, 詩聲分類, 皇清經解續編本。
13. 夏忻, 詩經二十二部古音表集說, 景紫堂全集本。

## II

最後に、《詩經》は記念すべき古代中国文学として、世界文学を構成する一部としてとりわけ興味がある。《詩經》は西周(紀元前 1122-770)と春秋(紀元前772-481)の中期において、中国人の民間創作が高い芸術性をもつ詩の形式をとって、正義とヒューマンイズムの思想、鋭い葛藤、深刻な社会的モチーフで貫かれていたことをまぎれもなく証明している。

中国文学はじめてのジャンル(抒情詩と抒事詩)は主として、労働の過程、農耕労働、部族の戦争での勲し、人民の生活、礼拝、儀礼のしきたりとむすびついた人民の創作、民間歌謡を基礎にして形成されたものであることも《詩經》は証明する。

《詩經》特に《国風》の民間歌謡は内容からいって、中国社会の精神生活において、その思想闘争において、何世紀にわたって非常に重要な役割を果たした。

《詩經》はまた、民間歌謡とむすびついた抒情的ジャンルが社会発展の過程において非常に複雑な社会的内容を獲得していることの証しにもなる。民間創作のジャンルはテーマのうえでは豊富となり、その芸術的な具体的表現において高い段階にたかめられた。しかもわれわれは、集団創作のうちに生れた民

間歌謡が、時代の矛盾と葛藤をさらに表現し、尖鋭な思想闘争、哲学の諸問題をもたらした個人の抒情詩へどのようにして転化していったかをみることができ

る。  
《詩経》特に《国風》と《小雅》の作品は諷刺と暴露のもっとも有力な方法、社会非難の表現となった。

中国の文芸学者たちの多くの研究は、《詩経》の思想内容、社会的モチーフ、その詩歌の芸術的技巧、人民性とリアリズムの傾向にむけられている。現代の学者、特に《詩経》の新らしい側面を解明している郭沫若と鄭振鐸の著作では、またこの古代文学の思想内容と芸術形式の複雑な問題に客観的に科学的マルクス主義の立場から光をあてようとした王瑤、詹安泰、丁力、葉聖陶、張西堂、その他の現代中国の学者の論文では、これらの問題に特別な注意がはら

14. 詹安泰、容庚、吳重翰、中国文学史、北京、1957年。

15. 丁力、中国詩歌的優良傳統、古典文学研究叢刊第一輯、上海古典文学出版社、1955年。

16. 葉聖陶、中国文学の伝統（ロシア語版《人民中国》、第4号、1957年）。

17. 張西堂、詩経六論。

《詩経》を研究することによって、その詩歌作品には古代における中国人民の歴史的発展、その偉大な創作上の努力、伝説上の偉業と勲功にかんする数多くのことが鮮かに反映されていることがわかる。人民と世に知られぬ詩人たち、この巨匠群の創作は人民の天才のすぐれた志向をたすけて鞏固なものにした。《詩経》の多くの歌謡と頌詩は日常生活やその部族で活躍して名を成した人を末永く記念し、大胆不敵な人びと、讚美すべき戦い、家や部族の幸福のために手柄をたてたすぐれた人物を記念し、日常のできごと、習慣、自然への憧憬、恋愛の抒情詩を保存したがる古人の気持をあらわしている。

中国語から直接翻訳したア・ア・シュトゥーキンの《詩経》全訳は詩的翻訳としてロシア語では最初のものである。該博な知識と専門的技巧で完訳をみたこの非常に貴重な労作が上梓されたことは、これまでわが東洋学に存在して

いた欠陥をおぎなうものである。シュトゥーキンの翻訳はソビエト人民と深い友情、兄弟の絆でむすばれた偉大な中国の古代文化研究において特筆大書すべき事件である。

《詩経》の歌謡は人民のたましいを反映している。この本の第一部が《国風》（《国のてぶり》）とよばれているのは怪しむにたりない。

《それぞれの国民の詩には——とヴェ・ゲ・ベリンスキーはいう——国民意識の直接的な表現がある。それゆえ詩は国民生活とのかかわりが密接である。詩が国民的なものであり、一国民の詩が他国民の詩とは異ったものであるのはこのためである<sup>18</sup>。人民のよりよい希望を創作に反映できた世界の大詩人たちの人民のたましいでつらぬかれた不滅の作品のように、《詩経》もそれに内属する人民のたましいによって滅びることなきものとなっている。それゆえ、《詩経》は今日にいたるまで偉大な中国人民の民族遺産であり、民族の誇りなのである。

真に不朽の若さを獲得した《詩経》はわれわれの時代までその魅力をうしなわず、現代の読者に生々とした反響をよびおこし、人の心を惹きつけ、よろこばし、感動させずにはおかない。人びとの意識に、人民の記憶に、永遠に生きることのできるのは、生活の真実を反映する芸術作品だけである。

中国人民の文学遺産は偉大であり、きわめて貴重である。そこには中国人民の知恵、精神的特徴と気質が反映されている。中国文学、中国詩の創始者と古典作家のすばらしい作品は、中国人民のたくましい道徳的力量、自由愛好の気持と独立心、繁栄と正義を志向する精神の芸術的表現である。

18. ヴェ・ゲ・ベリンスキー、古代ロシア詩（全集、モスクワ、1954年、第五巻）307-308頁。

## 訳 者 あ と が き

翻訳で甚だ申し訳ないですが、それでも「人文研究」にのせて下さった編集者にまずおん礼申し上げます。今から十何年も前の1961年に「詩経研究」の

序論の翻訳を「人文研究」にのせさせていただきました。私としては序論だけでも「人文研究」にのったことで満足しておりました。ところが今春東大へ赴任される前の伊藤漱平教授と面晤のさい談フェドレンコの「詩経研究」に及び、その翻訳が序論だけで結論がないのはおかしいから、そしてさらに故倉石武四郎先生のお墨付もあることゆえ「人文研究」にのせたらどうか、とのおすすめも頂いたわけです。そういう経緯で倉石先生のお手紙とともにこの結語の部分を「人文研究」にのせて頂きました。いまや亡き倉石先生の靈にこの拙訳をささげたいと思います。倉石先生のお手紙は次頁にあります。

倉石先生のお手紙は次頁にあります。

フエドレンコ博士の「詩經研究」は、一面、最近の欧米諸	國學者の硯光、ことに、ひろく西洋文學のたゞばかりみだり評	價と網羅したほか、中國古今の學者の硯光と大小となく、ひ	ろく涉獵し、これをひとつの体系のもとに整備したもののであ	り、歐米系統の學者の業績としては未曾有のものといつてよ	い。たゞ、詩經各篇と經文——た數章は、日本にとつて、決して	てめおろしいものでなく、これを全部紹介する必要があるが、	その首章乃至終章は、その硯光の成果を要約したものであつ	て、われ——中國の文藝に——たしんできたものにとつて、	他山の石となること、うたぬもない。	昭和三十一年十一月	東京大学名誉教授	倉石武四郎
----------------------------	------------------------------	-----------------------------	------------------------------	-----------------------------	-------------------------------	------------------------------	-----------------------------	-----------------------------	-------------------	-----------	----------	-------